

怖いんだ

さめてしまうのが

だからこの思いを小箱にしまって  
鍵をかけたい

けれど、恐怖ははずれ鍵穴から

ひっそりと抜け出して

戻ってくるんだ

だから君と一緒に閉じたい

鍵穴を二つにわけて

出口を細めて

そうすれば、わずかに溢れるだけだから

繰り返しくりかえし

鍵を回して  
穴を狭めて

僕は安心して  
君と眠りたい

思い出を絞首台にかけていく

お父さん、有罪

お母さん、有罪

お友達A、有罪

お友達B、有罪

ほか多数、有罪

そして私、有罪

空っぽの輪

擦れてちぎれる

最後に残ったのは、彼女だけだった